

まちかど・ズームIN!

みなさんからの素敵な情報を待ってます!

これからも地域へ貢献していきます

ソニー白石がテレビを寄贈



創立30周年を迎えた市内白鳥のソニー白石セミコンダクタ株式会社、地域への感謝の気持ちを込めて、白石市と蔵王町へ大型テレビを10台ずつ寄贈しました。4月21日に白石蔵王パレスホテルで行われた記念式典の席上で、ソニー白石の種茂慎一社長から川井市長と大宮蔵王町長に、それぞれ目録が手渡されました。市では、テレビを公民館など公共施設に設置することにしています。

放つ矢に祈りを込めて

小原地区「百矢納め」



小原新町の愛宕神社境内で4月23日、中世から続くといわれる伝統行事「百矢納め」が行われ、地元の方などが交互に的に向かって矢を射、五穀豊穡(ほうじょう)や家内安全などを祈りました。



今回射手となったのは10人。神社に参拝した後、くじによって射る順番を決めると、4人ずつ横に並び、28m離れた場所に置かれた直径1.6mの的に、通算で100本が当たるまで矢を放ちました。

百矢納めは、小原地区独特の神事で、愛宕神社のほか新町の琴平神社、舟倉屋敷の八幡神社、追倉の大雷神社、小倉の熊野神社で、それぞれの氏子を中心に百矢納めが受け継がれています。

ズドン! バーン!

火縄銃実演で「片倉鉄砲隊」を再現



春まつりが行われた5月3日、白石城で火縄銃の実演が行われ、迫力ある銃声が響きわたりました。実演は、鉄砲隊の復興を目指す市民有志でつくる宮城県古式鉄砲研究会の皆さんが、福島県古式鉄砲研究会の協力を得て、昨年に続き行ったものです。長さ1m、重さ10kg以上の火縄銃から放たれる「ズドン」という大きな音に、駆けつけた市民から歓声が上がっていました。

みどりを守ろう! 育てよう!

市の花「ヤマブキ」を植樹



弥治郎こけし村で「白石市みどりの日」の4月29日、市の花「ヤマブキ」の植樹が行われました。参加したのは親子連れなど約50名の市民で、植樹の仕方などの説明を受けたあと、こけし村イベント広場の外周に、合計160本のヤマブキを1本ずつ丁寧に植えました。また、植樹を終えた参加者は、こけしの絵付けを体験。6寸の白木に赤や黄、紫などで思い思いの模様をつけ、めんこいこけしを完成させていました。

高齢者の生活を支えます

温泉デイサービス・配食サービス開始

介護保険の対象とならない在宅の高齢者などの介護予防と自立した生活を支援するため、4月27日に温泉デイサービス、5月1日に配食サービスがそれぞれスタートしました。



温泉デイサービスは、週1回、スパッシュランドへ送迎し、レクリエーションや温泉入浴などのサービスを提供します。また、配食サービスは、月～金曜日までの週5回の夕食をお届けするものです。(利用要件、費用などのお問い合わせとお申し込みは福祉事務所 ☎22-1400へ。)

心も体もたくましく!

わんぱく相撲教室



6月25日に蔵王町で開催される「わんぱく相撲仙南場所」に出場する子供たちのための相撲教室が5月13日、大鷹沢小学校体育館で行われました。

参加したのは市内の小学生8名で、この教室を主催した白石青年会議所のメンバーたちが指導に当たりました。子供たちは四股の踏み方、土俵上での心得などを教わった後、指導者に勢いよくぶつかっていく「ぶつかり稽古」などで汗を流しました。

白石の伝承料理をどうぞ

武家屋敷「端午の節句展」



4月22日から5月5日まで、武家屋敷旧小関家で「端午の節句展」が行われ、五月人形や白石市指定無形文化財保持者の宮城昭守さん製作の太刀、脇差、打刀拵(かたなこしらえ)などが展示されました。

また、5月2日には白石市食生活改善推進員による笹巻きづくりの実演と試食会が催されました。今回は、第1・第2児童館の母親クラブの皆さんも笹巻きづくりを体験。5月14日に開催された「こどもまつり」で、その腕前を披露しました。

四月二十八日、全日本こけしコンクルの審査が行われたとき、審査委員である平井敏雄先生から、「こけしを食つ虫」という本を頂いた。平井先生は東北大学金属材料研究所の教授であり、専門は特殊耐熱材料及びファイナセラミックスの研究である。



川井市長の
せせらぎトーク

こけし随想

「さにある」ということばに強い感銘を受け、各コンクールなどで巷間に噂される、開催地の地元の系統が有利であるという説を統計的に分析し、他は知らず、こと白石のコンクールに関しては地元の有利性は全く根拠のないものであることを明らかにしている。

ところで、この本の最初の方に盛秀太郎さんと先生との交流が述べられている。昭和五十三年、六月末に当時の丸光デパートでこけし展が開催されたときに、阿部広史のこけしを買おうと思っただけで、抽選で作品の中に入れた。即売では買えず、幻と言われた盛秀の尺二のこけしがあった。

もしこのこけしが抽選で当たったら、持ってきた金では足りないというので、電話で奥さんに金を持ってこさせた。なんと、その奥さんがついでに私も言ってもらった番札で、盛秀のこけしを手に入れた。当時で価格は八万円。相当に思い切った買い物である。夜、晩酌しながら「馬鹿なことをしたもんだ。」と愚痴っている先生に、「そんな目で見ていてはこけしがかわいそうです。大切にしましょうよ。」と奥さんが言ったという。さすが薩摩おこじよである。

その後、先生のご両親が仙台に住まわれるようになり、お母さんが盛秀のこけしを大変気に入って、長い時間をかけてそのこけしを刺繍したクッションを盛土人に送った。その後、津軽の黒石に盛秀さんを訪ねたとき、「私は今年で、こんなものしか作れませんが。」と言った。こんなものを頂いたので、今ではこの間の交流が盛秀の手紙を通じて温かく描かれている。あのこけしは決して八万円ではできないものになっているという。ほのぼの

とした心の温まる文章である。

昨年、こけしコンクルの最後に先生ご夫妻とお会いしたことがあった。奥さんが「主人はこけしを見に来たんですが、私は白石の特産が好きでついでに買いました。」と言われたのを真に受けて、「こけしは奮わない。なんせ審査員の奥さんでさえも、こけしではなく白石の他の物産のためにいいでいるくらいだから。」などと言っていた私は、本を読んで穴があいたら入りたいたいような気持ちになった。

コレクターにとって、こんな理解のある奥さんを持つほどの幸せはない。一般にどんなコレクターでも、奥さんの目をこまかくして、いかに我が家に戦果品を持ち込むことに苦勞するかを、私もくい飲みで骨身にしみるほど知っているからである。

